

# “80后”作家と五四作家の心理表現に見られる形式と内容の変化 —方向補語“上”と動詞“愛”に着目して—

石 井 洋 美

## 1. はじめに

韓寒<sup>(1)</sup>は“80后”<sup>(2)</sup>を代表する作家であり、オピニオンリーダーであると言われる。韓寒の小説の魅力をひとりで言うなら、あらゆる深刻さを拒否するようなユーモア、パロディ、汚い言葉、その合間に、ごくたまに真顔に戻ったような静かな淡い叙情、きれいな風景といったところだろうか。

韓寒の登場人物たちは「人を好きになる」ことを表現する時“爱上”と言う。しかもその使用数は非常に多い。この言葉は何を表しているのだろう。この言葉に載せられた「愛」とはどのような「愛」なのだろう。この疑問をきっかけに、この一見文学の表現とは無関係に見える方向補語“上”の用いられ方と動詞“愛”に着目することで、中国語の書面言語の歴史的变化ばかりでなく、その作家の、或いはその作家が属する時代の世界観の違いまでを見ることができないかという例に遭遇した。

本文は、韓寒を始めとする“80后”作家と葉聖陶を始めとする五四作家を中心に、方向補語“上”と動詞“愛”を用いた心理表現を比較することで、作家や時代による心理の表現形式の相違と、それぞれの形式を用いて表現された心理内容の相違を見ると同時に、その相違を通して作家や作家が属する時代の世界観の有り様を知る試みを行ったものである。できる限り多くの事例をもとに、作品の具体的な場面、前後の文脈に結びつけて考察を進めていきたい。

## 2. 韓寒と“80后”作家の心理表現

韓寒は上海市金山区出身の作家であり、プロのレーサーである。1999年高校一年生の時、第一回新概念作文コンクールでグランプリを受賞して注目を集め、2000年に出版した長編小説『三重門』は大ベストセラーになった。現役の高校生が書いた学園ドラマは、18歳とは思えない大人びたユーモア溢れる言語表現と、痛烈な受験教育批判を含み、韓寒現象を巻き起こした。

『三重門』の主人公林雨翔は、初恋の相手であるスーザンへのラブレターに“我爱你”と書くか“我喜欢你”と書くかで悩み、“然而由于人的习惯，用“爱”显然有一字千斤敲山震虎的威力”（でも人の習慣として、「愛」の方が明らかに重みがあるし、戦わずして勝つ威力がある）と考えて“我爱你”を選ぶような純情な少年だった。しかし、その後の作品の主人公たちは、韓寒とともに成長していく。『一座城池』の“我”は他人の彼女に好意を持ち、『他的国 只屬於我們的独唱団』の左小龍は独特の精神的な魅力を持つ男性が好きという美しい娘、泥巴から好かれるが、片思いの相手である大人の女性黄瑩からは、これから成功しようとしている男性には興味がない、もう成功した男性が好きなのと振られ、『1988 我想和這個世界談談』の“我”は娼婦で妊婦の娜娜を連れてワンボックスカーで旅をする。

韓寒は「人を好きになる」という心理をどのように表現しているのだろうか。まず、動詞“愛”に着目して見ていくと、次のような用例が見つかる。<sup>(3)</sup>（下線は動詞“愛”）

- 1) 当一个男人同时对两个女孩子有好感时，他更爱谁决定于谁更不爱他。（『他的国 只屬於我們的独唱団』 p59）
- 2) 桃红色碎格子衬衫，浅蓝色裙子，马尾辫不戴眼镜的这个女孩子，你仰起的脸庞就像是我用手指抬起了你的下巴，你好奇的眼神就像我用另外一只手指在撩起你的刘海。同学，我爱你。（『1988 我想和這個世界談談』 p17）
- 3) 当时我认为，我这一辈子就爱这样一个人了，所以赶紧要让我知道，这个女孩子到底是李小慧、刘茵茵、陆美涵、倪菲菲之中的哪一个，我觉得哪一

个我都能接受，而如果1米5的她们能爱上这样1米4的我，我愿意为爱苦痛。（『1988 我想和這個世界談談』 p72）

4) 在他们的对话中，找老婆从来不以相爱为标准，如果你找到了户口排名比你靠前的人，你就是光宗耀祖，反之则是灰头土脸。（『1988 我想和這個世界談談』 p85）

1) では人を好きになる理由を茶化し、2) と3) の“我”は上ったものの下りられなくなった旗竿にしがみついたまま、相手が誰かもわからずに、遠目の印象だけで恋をする。大人になった韓寒の描く人物たちの恋愛は、ユーモアとジョークのうちに軽々と語られるが、こうした「人を好きになる」という真剣であるべき人の心理を敢えて突き離れたように扱うことの中に、4) に見られるような、韓寒の恋愛や結婚の現実に対する批判が込められているを感じる。<sup>(4)</sup>

更に動詞“愛”を含む用例を探していくと、韓寒は“爱上”を多用していることに気づく。（下線は動詞“愛”+方向補語“上”）

5) 磊子对我说，他之所以爱上玲是因为他从没见过睫毛比头发长的女孩。（『零下一度』 p147）

6) 泥巴早在学校的时候就爱上了到处溜达的左小龙，她都能分辨自己喜欢的男人的摩托车声和一般阿猫阿狗的摩托车声有什么区别，哪怕他们开的是同一款车。（『他的国 只屬於我們的独唱团』 p7）

7) 最重要的是，我要等待所有的女孩子都穿上裙子，我就能找到，究竟是谁，在我从旗杆上掉下来的那一刻，被我爱上了。（『1988 我想和這個世界談談』 p69）

韓寒は8作品で22回“爱上”を用いて好意を表現し、同じく「心理動詞+上」の形式を持つ“喜欢上”、“迷上”、“迷恋上”を加えると37回に上る。（下線は心理動詞+方向補語“上”）

8) 当我在学校里的时候我竭尽所能想如何才能不让老师发现自己喜欢上某人，（『像少年 啦飛馳』 p182）

9) 我的同桌在一次厕所门啦飛馳的偶遇之后真真切切地喜欢上了这个姑娘。（『一座城池』 p95）

心理を表現するために「心理動詞+上」の形式を用いることは、ごく一般的なことなのだろうか。韓寒と同世代の作家、郭敬明<sup>(5)</sup>、張悦然<sup>(6)</sup>の作品を調べると、やはりこの形式によって心理を表現した例が見つかる。

10) 很多年以后我问梨落，我说：梨落，我在看见你七天之后就爱上了你，你呢？你什么时候爱上我的？梨落跪在我面前，抬起头来看我，她说：王，当我从独角兽上下来，跪在你面前的时候，我就爱上了你。（郭敬明『幻城』p78）

11) 可是我并不是因为你姐姐才喜欢上你的，因为你是月神，你就是你，所以我才喜欢你。（郭敬明『幻城』p205）

12) 木偶艺人用各种奇妙的小手段把她引领到他的面前，此时，薇若妮卡已经爱上了木偶艺人。（張悦然『櫻桃之遠』p7）

13) 他原本就有点迷上她了，现在她的这句话就顺着他的迷恋变成了无比奥妙的解答：（張悦然『櫻桃之遠』p153）

では、「心理動詞+上」という形式は、中国語の書面語として世代を問わず使われている心理の表現方法なのだろうか。

### 3. 葉聖陶と五四期について

どのように心理を表現するのか、“80后”作家の作品との比較を、まず五四作家の作品から始めたいと思う。その理由は五四という時代の特徴にある。五四は中国近代文学が大きな成長を遂げた時期である。まず、中国語の文体が改まった。文学革命によって主張された口語文の使用が、雑誌や教科書がそれを採用することで実践に移された。西欧の近代思潮はその新しい口語の文体によって、翻訳を通じて中国へ紹介され、それには人間の内面、心理、恋愛などを含んでいた。西欧の小説と文学の概念が輸入されたことによって、五四作家は人物の内面を描くことに傾注し、登場人物の動作の描写を犠牲にしてでも心理の変化を描こうとしたと言われる。<sup>(7)</sup>恋愛についても、1899年に林紘が翻訳した『巴黎茶花女遺事』によって西欧の恋に関する知識や情報もたらされ、その後、五四期には西欧の「恋愛」という概念が輸入されて徐々に広まり、自

由な恋愛、自由な恋愛に基づく結婚という西欧の風習が高く評価された。西欧式の「恋愛」とそれに基づく結婚は、伝統的な親の決めた許婚との結婚の対極にあるものとして大きな反響を呼び、青年たちによって熱狂的に模倣されたと言う。<sup>(8)</sup> この時期の作品を見ることで、新しい口語の文体に載せて表現された豊かな心理表現の用例を得ることができるだろう。

五四作家から葉聖陶<sup>(9)</sup>を標準として選び、その代表作である『倪煥之』を心理表現の例を取り上げる対象とした。葉聖陶を選んだ理由は以下の通りである。葉聖陶は「文語と方言を排し、標準的な国語を用い、文字、言葉、文法、修辭のいずれにおいても標準化、規範化することに努めながら、独自のスタイルを生み出した」<sup>(10)</sup>とされる作家である。小説を書くことについて葉聖陶は、「書くことは苦しい作業だ。書くのがもとより遅い。一節書いては三、四回、多い時には十数回声を出して読み返すが、実のところ、数文字、或いは一言、二言増減させるに過ぎない」、「書き始めたもののまだ完成していない間の緊張感、やや大げさに言えば、産褥に就いて呻吟する産婦に多少似ている」<sup>(11)</sup>と述べ、言葉と文章の完成度に対して強いこだわりを持っていることがうかがわれる。『倪煥之』の執筆についても「すらすら書くというわけにはいかず、できれば例によって普通だが、字句の斟酌に対する潔癖症は益々高じて、そのため毎回七、八日の執筆期間は、全ての余暇をほとんど書くために費やした」<sup>(12)</sup>と述べている。このようにして書かれた葉聖陶の文章と文章を書く姿勢について曹惠民は、「葉聖陶の小説を読んだ人はみな、彼の作品には確かに独自の言葉と情趣があると言う。そうした特色と情趣は、まず言語に表れている」、「恐らくは彼が長い間教員をし、編集の仕事をしてきたために生じた職業癖だろうか、彼が意識的に典型的な白話文学の言葉を作り出そうとしているからだろうか。葉聖陶の作品の言語は、現代の中国青年が学習する上で手本になれるものだ」、「人が最も厳格な文法学の見地からその作品を審査した場合でも推敲に耐え、咀嚼に耐えるものになっている」<sup>(13)</sup>と評している。葉聖陶の文体は五四期の標準的な口語文体を代表していると言えるだろう。曹惠民はまた「葉聖陶の小説には人物の外見、服装はあまり描かれず、人物の対話も取り分け得意で

はないようだが（勿論彼の作品は素晴らしい対話に乏しいわけではない）、心理表現は著しく多い<sup>(14)</sup>と述べている。そして『倪煥之』は自由な恋愛の末の結婚に対する失望を一つのテーマとしているから、韓寒の描く恋愛と比較することもできるだろう。

葉聖陶の用例を標準として、葉聖陶の世代の作家及びその前後の世代の作家の用例を参照し、葉聖陶と韓寒の心理表現を比較しながら見ていくことにする。

#### 4. 韓寒と葉聖陶の心理表現の比較

##### 4.1 「心理名詞+動作動詞+上+抽象的な場所/もの」の形式による心理表現

5)から13)に示したように、“80后”作家の作品には「心理動詞+上」による好意の表現が多く使用されている。これに対して、葉聖陶の『倪煥之』には「心理動詞+上」の用例は見られない。『倪煥之』には恋愛が描かれていないということではない。倪煥之は友人金樹伯の妹佩璋と恋愛の末結婚する。金佩璋は新しい教育について熱く語る倪煥之に惹かれ、倪煥之は小学校での新しい教育の試みが挫折しそうな時に、励まし、自信を持たせてくれた金佩璋に惹かれていく。『倪煥之』第十四章には、倪煥之が金佩璋を強く意識していく様子が、14)のように精緻な情景描写、心理描写によって述べられている。

14) 那永不能忘的傍晚，暮色笼成情爱的帐幕，话题里尽有倾吐肺腑的机会，心脏的每一回跳动，鼻息的每一回吐纳，都奏出“我爱着你”那句话的激动的节拍。然而，惟有那句话，喉咙里仿佛给什么东西塞住了，无论如何说不出来。（『倪煥之』 p119）

しかし、葉聖陶は金佩璋に惹かれる倪煥之の気持ちを「心理動詞+上」を用いて表現していない。では、葉聖陶はどのように心理を表現しているのだろうか。まずこの“上”に着目して見ていきたい。

“上”は方向補語である。本来は人やものが低所から高所へ移動することや目前の目標に向かって移動することを表す。また、それが抽象化されたり、転化されたりすることによって生じた、接触、付着して固定すること、達成を予期していた、または望んでいた動作、目的が実現することなどを表す派生義を

持つ。<sup>(15)</sup> “上”に着目して『倪煥之』を見ていくと、それを用いた多数の心理表現が見つかる。<sup>(16)</sup> (例文中の下線は、一重線が動作動詞+方向補語“上”、波線が心理名詞、二重線が抽象的な場所/ものを示す。)

15) 占有了宝物似的快意浮上他心头，使他的胆壮了好些；他振一振精神说：“我们现在在一起了！”(『倪煥之』 p142)

16) 煥之点头说：“妈妈说得不错，婚姻不是买一件零星东西那样轻便的事情。”一阵得意涌上心头，他站起来走到母亲眼前，语声里带着无限的欢快，说：“不过对于金小姐，我看得很仔细了；她一点没有富家小姐的习气，过什么样的日子，她是并不拘的。(後略)”(『倪煥之』 p128)

15)は煥之に“我們現在在一起了！”と口に出して言うほどの勇氣を持たせた感情の動きを表現している。16)は母に向かって話しながら急に気持ちが高揚したことを表し、その気持ちの高揚が、煥之の、立ち上がって母に歩み寄り、更に言葉を重ねるという行動を触発している。

17) 一个念头越来越清楚地浮上她的意识界，就是无论怎样，必须给他写封回信；写当然是亲手写，而且要立刻写，否则劳他久盼，过意不去。(『倪煥之』 p123)

18) 忽然，她从镜子里注意到自己的脸色红红的，眼睛里闪着喝醉了似的异样的光；一缕羞意透上心来，眼睛立刻避开了镜子。(『倪煥之』 p105)

17) はある考えが佩璋の意識に上ることを、18) は恥じらいの感情が心を突き抜けることを表している。

19) 一种怀旧的情绪兜上他心头，似乎有点怅然，但决不带感伤的成分。(『倪煥之』 p27)

20) 失望的黑幔一时蒙上他的心。(『倪煥之』 p96)

19)は懐かしいという気持ちが心を包んだ、20)はとばりに譬えられた失望という感情が、心を覆ったという言い方で心理表現をしている。

「心理名詞+動作動詞+上+抽象的な場所/もの」を用いた心理表現は、葉聖陶と同世代の茅盾も『子夜』の中で多数使用し、また郁達夫の作品にも用例が見られる。

- 21) 质夫看了他这一副形容，更加觉得有一种热情，涌上他的心来，便不知不觉的逼进一步说：(郁達夫『茫茫夜』p33)<sup>(17)</sup>
- 22) 然而正当这时候，一个后悔又兜头扑上他的全心灵，并且这“后悔”又显灵为一个人的声音在后面叫唤着。(茅盾『子夜』p119)<sup>(18)</sup>
- 23) 可是她并没睡着，她睁大了血红的老眼，虚空地看着；现在是狂怒落火，冷冰冰的恐怖爬上了她的心了。(茅盾『子夜』p347)

これらの例に共通する特徴は、いずれも主語に心理を表す名詞を充て、動作動詞に方向補語“上”を付加することで、ある感情、心情、考えが、心や意識といった抽象的な場所に浮き上がったり、湧きあがったり、這い上がったり、或いは心や意識という抽象的なものを包んだり、覆ったりするという言い方で、心理を表現しているところにある。この形式は、心の動きという実際には目に見えないものを見えるかのように表現する、感情のプロセスを表現する、一種の写実的な方法であったのではないだろうか。

では、五四以前の作品にも「心理名詞+動作動詞+上+抽象的な場所/もの」による心理表現はあるのだろうか。「人を好きになる」ことにまつわる心理表現の多いことが予想される鴛鴦胡蝶派の恋愛小説の内、清末・民国初期に書かれた『恨海』、『玉梨魂』、『断鴻零雁記』を調べてみると、この方法によって心理を表現した例は見られない。動詞“涌”を手がかりに心理を表現した例を見ていくと、以下のようなものが見つかる。(下線は動詞“涌”)

- 24) 棣华听了一席话，如冷水浇背，如天雷击顶，如万箭攒心，那酸甜苦辣的味道，一齐向心上涌来，(吳趸人『恨海』p64)<sup>(19)</sup>
- 25) 旧恨新愁，一时勾起，无穷心事，不尽思量，如惊涛，如怒浪，一刹那间，澎湃而起，此即所谓心潮也。(徐枕亚『玉梨魂』p62)<sup>(20)</sup>
- 26) 余自是心绪潮涌，遂怏怏以归。(蘇曼殊『断鴻零雁記』p23)<sup>(21)</sup>

いずれも心理を表す名詞或いはその比喩(いずれも無生物)を主語としているが、動詞に直接“上”を付加してはいない。同じ鴛鴦胡蝶派の作品でも1930年に書かれた張恨水の『啼笑因縁』には用例が見られる。

- 27) 这种环境里，那万斛困愁，便一齐涌上心来，人不知在什么地方了。(張



恨水『啼笑因縁』p242)<sup>(22)</sup>

中国語の書面言語の歴史という観点から見ると、「心理名詞＋動作動詞＋上＋抽象的な場所/もの」による心理表現が一般化したのはそれほど古いことではなく、口語文体で文学作品が創作されるようになった五四の頃にあるのではないだろうか。

「心理名詞＋動作動詞＋上＋抽象的な場所/もの」による心理表現は現代まで受け継がれ、韓寒の作品にも存在する。

28) 雨翔也不敢相信這麼短時間裡他居然信口開了一條大河，心還被快樂托得像古人千里之外送的鴻毛，輕得要飛上天。(『三重門』p214)

29) 林雨翔的意識終於趕了上來，與意識同行的還有渾身的冷汗。(『三重門』p97)

しかしその数は「心理動詞＋上」による心理表現に比較して非常に少なく、且つ一例を除いてあとは全て『三重門』の中で使われている。これについては韓寒自身が『南方周末』のインタビューの中で、自分の代表作は『三重門』であると言われるが、自分自身の評価は異なるとして次のように述べている。「あなたの言うように、一作目の作品は確かに内心を曝け出すといった類のものになりがちで、僕の一冊目の本もそのようなものだ。けれども後になってそれは決して僕の好きな創作スタイルではないことに気づいた。なぜ内心を曝け出す必要があるんだ。僕は優れた作品とは冷酷であるべきだと思う。だからその後の僕は基本的にどれもわれ関せずといったスタイルだ」。<sup>(23)</sup>「実はあれは戯曲を書いている状態であって、小説を書いている状態ではない。それらを書くことで自分も感動させられる。でも僕はそれ以来、こうした状態が好きではないんだ」。<sup>(24)</sup>韓寒の言葉から（『零下一度』は隨筆、短編小説集であり、中に『三重門』以前の作品を含むためひとまず置くとして）、『三重門』と『像少年啦飛馳』の間で韓寒の小説の書き方に変化が起ったことがわかる。<sup>(25)</sup>

韓寒と同世代の郭敬明の『幻城』、張悅然の『桜桃之遠』にもこの形式による心理表現の例は非常に少ない。これだけで“80后”作家全体の傾向を述べることはできないが、胸に迫る想いや高揚する気持ちを目に見えるようには表現

しない、或いは表現したくない、或いは感情のプロセスをあまり重んじないということがあるのではないと思われる。

#### 4.2 “爱着”について

次に、葉聖陶の『倪煥之』を“爱”に着目して見ていこう。(下線は動詞“爱”)

30) 我的话只有一句，简单的一句，就是我爱你！（『倪煥之』 p121）

31) 一滴一滴眼泪从她的眼眶里滚出了，掉在手里的信笺上；湿痕化开来，占了三分之一以上的部分。墨色着了湿显得光润夺目，“我爱你”三个字似乎尤其灿烂，富有诱惑的魅力。（『倪煥之』 p123）

32) 她曾用一句话振作你渐将倦怠的心情，你因而想，如得常在她旁边该多么好呢，你忘了么？你爱她，从第一次会见便发了芽，直到开出烂漫的花贡献与她，是费了几许栽培珍护的心的，你忘了么？你有好些未来生活的图景，其中的主人翁是你共她，你把那些图景描写得那么高妙，那么优美，几乎是超越人间的，你忘了么？……（『倪煥之』 p125）

30)は煥之が決意して佩璋に書いた手紙の中の言葉で、31)はその手紙を受け取った佩璋の衝撃と感動を述べている。“我爱你”の三文字がひとときわ輝いて見えるという叙述が、五四期の青年にとって恋愛とはどのようなものであったかを、よく表していると思われる。32)からは、人を愛するという気持ちは時間をかけて育てるものであるというメッセージが伝わってくる。

“爱”を含む表現を更に見ていくと、先に挙げた14)を始めとして葉聖陶は“爱着”を多用している。(下線は動詞“爱”+アスペクト助詞“着”)

33) 他想他是爱着金小姐了；金小姐的一句话有使他振作的力量，他在她旁边，便觉一切都有光辉，整个生命沐浴在青春的欢快里，这就可知不仅是朋友间的情愫了。（『倪煥之』 p117）

34) 总之，我崇拜你，我爱着你；我的心灵永远与你的融合在一起；你我互相鼓励，互相慰悦，高唱理想的歌儿，同行在生命的康庄大道上。（『倪煥之』 p122）

同じ「心理動詞+着」による心理表現として“恋着”の用例も見られる。

35) 他们的信里什么都要写。一对男女从互相吸引到终于恋着, 中间总不免说些应有的近于痴迷又像有点儿肉麻的缠绵话, 他们却缺漏了那一段; 现在的通信正好补足缺漏, 所以那一类的话占了来往信札大部分的篇幅。(『倪煥之』 p134)

“爱着”という表現に込められた「愛」とはどのようなものなのだろう。33)は煥之が佩璋を愛しているという自分の気持ちに気づいたことを言い、なぜそう思うのか、その理由が述べられている。34)は煥之が佩璋への手紙の中に書いた言葉だが、あなたのことを愛していると真剣に告白し、二人で歩む明るい未来について語っている。35)は葉聖陶自身の経験を書いたのではない。人の紹介で結婚した葉聖陶は結婚してから恋愛したようなもので、葉聖陶も妻もともに教員であったため、それぞれの任地に住みながら手紙のやりとりをしてお互いの気持ちを深めたという。<sup>(26)</sup>葉聖陶の“爱着”によって表された「愛」はいずれも純真な愛である。『倪煥之』は「五四時期とはどんな時代か、それを知りたければ、まずこの作品を読めばよい」<sup>(27)</sup>と言われる作品である。それは勿論五四期の恋愛の有り様だけについて述べた言葉ではないが、五四期を誠実に生きた若者の人生の一部に純真な恋愛も含まれているだろう。葉聖陶は「私が述べることは、勿論、私の認識と理解の範囲を超えてはならない。認識と理解が不十分であると、述べたことが歪んだ異常な形になってしまう」<sup>(28)</sup>と述べている。葉聖陶は実際に目にした五四期の恋愛を描くために、“愛”、“爱着”という表現を用いた。その“愛”や“爱着”によって表現された恋愛は、自ら選んだ相応しい相手と共に人生の目標に向かって歩むという理想の実現に結びついている。

1920年代、30年代の作品から“爱着”を探すと、葉聖陶の作品以外からも次のような用例が見つかる。それらはいずれも真摯な愛を表現している。

36) 春天! 春天! 我知道若不是因了有小萍在爱着我, 你决不会平白的跑到人间来的。(葉靈鳳『愛的戰士』 p171)<sup>(29)</sup>

37) 我真是爱着你, 打仗革命也是为了你! (茅盾『虹』 p294)<sup>(30)</sup>

38) 我总以为你还是爱我的, 我永远是爱着你, 依靠着你, 我想着你爱我, 不

断的，你一定关心我得利害，我就更高兴，更想向上，更感觉得不孤单，更感觉得充实而愿意好好做人下去，（丁玲『不算情書』p802）<sup>(31)</sup>

「心理動詞＋着」という表現は、いつ頃から使われ始め、何を意味しているのだろう。アスペクト助詞“着”は動作の進行や動作の結果状態の持続を表す。王力(1954)は「“着”は本来『付着』の意味から変化してきたものであるため、必ず動作性の強い動詞の後ろに付加しなければならない」<sup>(32)</sup>と述べ、“着”の使用の拡大は文法の西欧化現象の一つであるとしている。これを根拠として多くの研究者が、五四より後“着”が動作性の不明瞭な動詞の後ろにも用いられるようになったのは、西欧語の影響であると判断している。<sup>(33)</sup>ここで主に議論されているのは“有着”のような表現であるが、「心理動詞＋着」についても西欧語の影響を受けて文法の精確さを追求し、“愛”、“恨”などに本来必要のない“着”を付加して中国語の簡潔さを損なっているという見方や、<sup>(34)</sup>張愛玲の小説には“恋愛着”のような西欧化した文法表現が幅広く使用されているとの指摘もある。<sup>(35)</sup>その一方で、「心理動詞＋着」の用例は明清白話小説の中にも見られるとして、張愛玲の用例などは、その流れを汲む中国古来の用法であるとする主張もある。<sup>(36)</sup>崔山佳(2013)は“愛”、“恋”、“想”、“貪”などの心理動詞が“着”を伴うのは仏教の影響で「執着する」ことを表し、この“着”は動詞性であるとの先行研究を紹介する一方、明代の用例からは既に“着”と仏教との関係は見出せないと述べている。“着”と心理動詞の共起の起源と変遷については、今後の研究を待つことにしたい。ここでは、それが“愛着”、“恋着”という形で作品の中に用いられ、具体的な場面と結びついた時に、私たちは何を感じながらそれを読むのかということを考えてみたい。確かに36)のような用例を見ると、正に愛しているという状態にあることを言っていて、文法の西欧化による進行相の増加という説明が納得できるように思われる。しかし、33)や35)のような用例からは、まだ愛とは呼べない心の状態から愛しているという状態へと近づいていく過程が感じられはしないだろうか。これらの“着”に動詞性の“着”を感じるのは、漢字の原義に引かれた錯覚なのだろうか。

### 4.3 “爱上”について

では、韓寒が多用している“爱上”は、1920年代、30年代の作品には見られないのだろうか。鴛鴦胡蝶派の作品を見ると、文言で書かれた『玉梨魂』、『断鴻零雁記』には“爱上”の用例はなく、白話の『啼笑因縁』には用例が見られる。(下線は動詞“爱”+方向補語“上”)

39) 刘将军道：“有主儿要什么紧！漫说没出门，还是人家大闺女，就算出了门子，让咱们爷们爱上了，会弄不到手吗？你猜怎么着？”(『啼笑因縁』 p180)

また、五四以降の現代小説では、葉靈鳳らの作品に以下のような用例が見られる。

40) 被我爱上的女性，永世不会离我而去。(葉靈鳳『菊花夫人』 p101)<sup>(37)</sup>

41) 我现在老是想着，如果我当时真正地爱上了他，而且嫁了他，那我现在的境况将要是怎样的呢？这倒是很有趣的事情呵……(蔣光慈『麗莎的哀怨』 p70)<sup>(38)</sup>

42) “其实这丝毫不成问题。实际上你差不多跟家庭脱离了关系。你在外面爱上了一个女人或者和她同居或者结婚，没有一个人来干涉你。”(巴金『霧』 p36)<sup>(39)</sup>

43) 他留学以前早就定了亲，只因他爱上了一个女同学，抵死反对家里的亲事，路远迢迢，打了无数的笔墨官司，几乎闹翻了脸，他父母曾经一度断绝了他的接济，使他吃了不少的苦，方才依了他，解了约。(張愛玲『金鎖記』 p164)<sup>(40)</sup>

これらのことから、“爱上”は五四以降の口語文体の作品中に使われ始め、葉聖陶が『倪煥之』を創作した頃にはなかったわけではないが、まだ少なかったということが予測される。しかし、文学創作の口語化を推進しようとしていた葉聖陶が使用していないのはなぜなのか、“爱上”によって表現される恋愛との間に何らかの関係、或いは矛盾があるためではないだろうか。

この方向補語“上”は接触、付着することを表すと同時に、接触、付着した後の持続状態までも含めて表すことができる。楊玉玲(2011)は「動作がある人

またはある物に関わり、かつあくまでも放さないことを意味する」<sup>(41)</sup>として  
 いる。上記の例はいずれもある人をすっかり好きになり、或いは執心し、離れ  
 られなくなってしまうことを表している。しかし、それだけなのだろう  
 か。39)で鳳喜を見染めた軍閥の劉將軍は、手段を選ばず彼女を手に入れよう  
 とする。40)はナルシスティックな男性の人妻に対する妄想を、41)はロシア貴  
 族の夫人が革命のために没落し、あの時ボルシェビキの若者に恋をしていた  
 らこんなことにならなかったのではと回想する場面、42)で主人公は友人のこ  
 の強い言葉を聞いた後、それでは良心の呵責に耐えないと感じる。43)は留學  
 生が国に親の決めた許嫁がいるにも関わらず留學先で同級生に恋をしたことを  
 言っている。“愛上”によって表現された「愛」は、どこか社会常識に反した、  
 良いとは思われないことに熱中してしまうという意味を帯びているのではない  
 だろうか。葉聖陶が“愛上”を用いなかったのは、まだあまり使われていなか  
 ったという理由以外に、葉聖陶の描こうとした恋愛が“愛上”によって表現され  
 る類のものではなかったということはないだろうか。

再度、韓寒ら“80后”作家の“愛上”を見てみよう。5)から9)の“愛上”からは、  
 良くないことに夢になったという意味は感じられない。しかし同時に、あく  
 までも放さないという強い思い入れもあまり伝わってこない。特に7)や10)は  
 いつ“愛上”という事態が発生したのか、その時点をはっきりと述べ、そこで  
 は愛するに至る過程も、理由も問題にされていない。韓寒を始めとする80后作  
 家たちは、「人を好きになる」という心理を行為化しているように感じられる。

## 5. 終わりに

韓寒が多用している“愛上”を葉聖陶は『倪煥之』の中で一度も使用してい  
 ない。この相違に対する疑問を端緒として“80后”作家と五四作家の心理表現  
 の特徴を見ていくと、心理を表現するために用いる形式に異なる傾向があるこ  
 と、異なる形式を用いて、或いは同じ形式を用いながら、表現されている心  
 理の内容に違いがあることがわかる。五四作家は心情を動的に描写するととも  
 に、動詞“愛”を用いて「愛する」という意志や「愛している」という心の状

態を述べ、その心情に至る過程や理由を重視する。それに対して、“80后”作家は「好きになった」という結果だけを述べ、「好きになった」理由や「好きになる」までの過程をほとんど顧みない。これらの相違は、作家個人の癖や嗜好の問題によるばかりでなく、中国語の書面言語の歴史や、作家の属する時代の恋愛観や結婚観の相違、ひいては、その時代やその時代に属する作家の持つ世界観の相違に原因を求めると言えるだろう。

## 注釈

- (1) 韓寒(1982-)の作品は、小説としては『三重門』(2000年)、『零下一度』(隨筆、短編小説集、2000年)、『像少年啦飛馳』(2002年)、『長安乱』(2004年)、『一座城池』(2006年)、『光榮日』(2007年)、『他的国 只屬於我們的独唱团』(2009年)、『1988 我想和這個世界談談』(2010年)などがある。小説のほか、主にブログを通じて雑文を發表している。香港の作家陳寧は韓寒の雑文について、「こうした(韓寒が雑文の中で述べているような一筆者)言葉は、他の人には言えないわけではないが、彼ほど見事に言い表すことはできない」(韓寒『青春。』新經典文化(2010年)「推薦序 閲讀韓寒 回歸說話的藝術」p12)と述べ、特に富士康の連続飛び下り自殺事件をもとに、現在の中国の經濟發展や国際的な地位が、廉価な労働力として人生を消耗する若者の現状の上に成り立っていることを訴えた『青春』を名文と称えている。2011年末には、ブログ上に發表された革命、民主、自由について述べた三編の文章が、賛否両論大きな反響を巻き起こした。2014年には初の映画監督作品『后会無期』が公開された。
- (2) もともとは文学界で1980年代生まれの作家を指す言葉として使われたが、現在では1980年代に生まれた人々の総称となっている。一人っ子政策(1979年)施行後に生まれ、改革開放政策(1978年)による經濟發展とともに成長した世代である。
- (3) 韓寒の用例は下記の本から取り上げた。例文に作品名と本のページ番号を付記する。

- 『三重門』『敏感詞。』SIDE B 三重門十周年記念版 新經典文化 (2012年)  
『零下一度』万卷出版公司 (2008年)  
『像少年啦飛馳』万卷出版公司 (2010年)  
『長安乱』万卷出版公司 (2010年)  
『一座城池』二十一世紀出版社 (2006年)  
『光榮日』二十一世紀出版社 (2007年)  
『他的国 只屬於我們的独唱团』万卷出版公司 (2011年)  
『1988 我想和這個世界談談』國際文化出版公司 (2010年)
- (4) 韓寒は「這一代人」(韓寒『青春。』新經典文化 (2010年) pp25-27) の中で「多くの人は年齢に嫁ぎ、住居に嫁ぐのであって、恋人に嫁ぐのではない」、「恋愛的問題」(同書pp67-68) の中では「恐らく恋愛なんて、ほとんどは自分の面子のためだ」と述べ、現代の結婚や恋愛に正当な理由を求めることを否定している。
- (5) 1983年四川省自貢市出身の作家。2001年第三回、2002年第四回の新概念作文コンクールで連続して一等賞を受賞した。郭敬明の用例は、2003年作、『幻城』長江文芸出版社 (2008年) による。
- (6) 1982年山東省済南市出身の女性作家。2001年第三回新概念作文コンクールで一等賞を受賞した。韓寒、郭敬明とともに商業的に最も成功した“80后”作家であると言われる。張悅然の用例は、2004年作、『桜桃之遠』上海文芸出版社 (2010年) による。
- (7) 陳平原『中国小説叙事模式的轉變』北京大学出版社 (2002年新版) p24参照
- (8) 張競『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店 (1995年) pp10-11参照
- (9) 葉聖陶 (1894-1988) は江蘇省蘇州市出身の作家であり、教師であり、編集者である。1911年中学卒業後、貧困のために進学をあきらめ、小学校教師になった。1915年小学校の国語教科書を編集したことをきっかけに、1923年からは商務印書館の編集者として『文学周報』、『小説月報』などの編集に当たった。1930年以降は開明書店において国語教科書を編集し、新しい国語教育に貢献した。作家としては1914年に文言小説を執筆したことに始まるが、文学革命の動



“80后”作家と五四作家の心理表現に見られる形式と内容の変化

きの中で白話小説に転じ、教員生活の中から優れた作品、代表作と言われる作品を生み出している。1919年北京大学の学生が創刊した『新潮』に投稿してから1930年頃までが創作の最盛期で、1921年1月の「文学研究会」設立に当たっては発起人の一人となり、『小説月報』、『晨报副刊』の執筆者として招請された。葉聖陶の用例は、『倪煥之』人民文学出版社（1994年）による。

- (10) 劉增人 馮光廉編『中国現代文学史資料匯編（乙種）葉聖陶研究資料』北京十月文芸出版社（1988年）所収 張大明「葉聖陶」（抄録）p588
- (11) 葉至善編『中国現代作家選集 葉聖陶』人民文学出版社（1985年）所収、1932年作、「隨便談談我的写小説」pp30-31
- (12) 同上所収、1929年作、「『倪煥之』作者自記」p21
- (13) 劉增人 馮光廉編『中国現代文学史資料匯編（乙種）葉聖陶研究資料』北京十月文芸出版社（1988年）所収 曹惠民「葉聖陶小説的芸術特色」（抄録）p565
- (14) 同上p560
- (15) 劉月華主編『趨向補語通釈』北京語言大学出版社（1998年）pp81-136参照
- (16) 心理表現であるか否かの判断には困難が伴うが、ここでは、「感情、心情、考えなど心理を表す名詞+動作動詞+上+心、意識など抽象的な場所/ものを表す名詞」の形式を用いているもののみを心理表現とする。名詞に比喩が使われている場合は、何を譬えたものかを考え判断する。
- (17) 1922年作。『郁達夫文集』当代世界出版社（2010年）による。
- (18) 1932年作。22)、23)の用例は、『子夜』人民文学出版社（2014年）による。
- (19) 1906年作。『恨海』豫章書社（1980年）による。
- (20) 1912年作。『玉梨魂 雪鴻泪史』北京燕山出版社（2014年）による。
- (21) 1912年作。柳亜子編『蘇曼殊全集 三』中国書店（1985年）による。
- (22) 1930年作。27)、39)の用例は、『張恨水全集 第14卷 啼笑因縁』北岳文芸出版社（1993年）による。
- (23) 『南方周末』主編『說吧, 韓寒』二十一世紀出版社（2013年）p55
- (24) 同上p60
- (25) 2011年、革命、民主、自由について述べた『韓三編』を巡っての討論の中か

ら、韓寒にはゴーストライターがいる、グループで創作しているとの疑惑が持ち上がり、サイエンスライターの方舟子らは『三重門』を始めとする複数の初期作品は、韓寒の父親が書いたものであると主張している。

- (26) 葉至善編『中国現代作家選集 葉聖陶』人民文学出版社（1985年）所収、1932年作、「随便談談我的写小説」p28
- (27) 吉田富夫『中国現代文学史』佛教大学（1996年）p45
- (28) 葉至善編『中国現代作家選集 葉聖陶』人民文学出版社（1985年）所収、1932年作、「随便談談我的写小説」p30
- (29) 1928年作。『海派文化長廊 葉靈鳳小説全編 上』学林出版社（1997年）による。
- (30) 1930年作。『茅盾全集 第2巻 小説二集』黄山書社（2014年）による。
- (31) 1933年作。『丁玲文集 下』滙文閣書店（1972年）による。
- (32) 王力『中国語法理論』下冊 中華書局（1954年）p303
- (33) 賀陽『現代漢語欧化語法現象研究』商務印書館（2008年）pp182-186参照
- (34) 謝耀基『現代漢語欧化語法概論』光明図書（1990年）p117参照
- (35) 陳亜明『張愛玲小説的語言的欧化成分』『小説評論』2008年第5期参照
- (36) 崔山佳『漢語欧化語法現象專題研究』巴蜀書社（2013年）pp538-543参照
- (37) 1926年作。『海派文化長廊 葉靈鳳小説全編 上』学林出版社（1997年）による。
- (38) 1929年作。『蔣光慈文集3』上海文芸出版社（1985年）による。
- (39) 1931年作。『愛情三部曲』南国出版社による。
- (40) 1943年作。『張愛玲集 傾城之戀』北京十月文芸出版社（2006年）による。
- (41) 楊玉玲『現代漢語 語法答問（下）』北京大学出版社（2011年）p51。楊は、“我真不理解，你怎么会爱上他呢？”などの例文を挙げている。